



甘い残り香

作詩 おも子

○本

生きとし生きる星達が

漆黒の空に、瞬いで

僕の知らない星座達

閃光放ち流れゆく――

明鏡止水――

心の瞳閉じれば

其処に、見えるもの

風無き世界、風感じ

匂い伝える海原に――

心の声が、聞こえゆく

星降る夜に、耳澄まし

地球の鼓動、感じては

愛しき人を、想いゆく――

張りつめた糸、切らしては

静かな涙、頬伝う

涙の中に、そら想う

解放される心かな

○夕闇

部屋に散らばる

仮初めの姿、崩して咲き乱れ

我に還らんと、欲しては

君濡れていく艶やかと——

君の囁き気持ちよく

甘く耳朶、犯しては

大蛇のごとく、巻き付いて

君の躰の芯攻める——

夕闇の中、透ける肌

光彩見詰め、うつつと

突き上げられる快樂に

身悶え喘ぎ爪立てる——

滴り落ちた白濁

悪戯た、舌絡めつな

上目遣いごと、舐め回す

震える躰、愛おしく——

○ 入浴のお湯

生ぬるお湯にて、浮かぶ

君の温もり想い出す

掌のお湯、零れ落ち

君の口づけ、想い出す――

三十七度平熱が

ホツカイロみたい、熱を持つ

唾液で交わす甘い蜜

時を忘れて、kissをする

君が触れれば熱を持つ

素直な臍厭らしく

トキめく心、止められず

漏れる吐息が、夜を舞う

生ぬるお湯、漂いで

瞳を閉じて、君想う

何故その瞳、潤もつか

閉じた瞳の、君描く――

○ニヤンがぶらぶら

息を切らして、駆けつけた
待ち合わせ場所、その背中
子猫みたいに近づいて
人さし指で突っついた

驚かせたくなるわけは、
驚く顔が好きだから
あなたは照れて微笑んで、
「今日可愛い」と呟いた

滅多に聞けないその言葉
わたしも照れて俯いて
並んで歩く、わたしたち
二つ林檎が寄り添って――

「何食ぶよぶらぶら？」と尋ねられ

「あなたがいい」とノロケたら

「あほ」と言いつつ目をそらす

照れた顔も、好きだから

御読み頂き心から感謝申します。

甘い残り香

<http://p.booklog.jp/book/60140>

著者 : omoko1007

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/omoko1007/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/60140>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/60140>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ